OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『観音冥応集』と宝泉寺縁起 : 蓮体の備中における書写活動をめぐって
Author(s)	中川, 真弓
Citation	詞林. 2007, 41, p. 51-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67565
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『観音冥応集』と宝泉寺縁起

――蓮体の備中における書写活動をめぐって――

中川　真弓

はじめに

『観音冥応集』は、近世真言教学の碩学として知られる蓮体（一六六三～一七二六）が、観音にまつわる霊験譚を書承・口承の両面から広く求め、収載した説話集である。[1]彼の執筆動機の一端は、「常ニ歎クラク、我日本国ハ観音垂迹ノ洲ニシテ、霊応ノ多事、支那竺乾ニモ譲ズ。而モ記録ノ大成ナキ事、寧震多摩掘ヲ、徒ニ塵堆ニ埋ニアラズヤト」（『観音冥応集』叙）のように表明されている。すなわち、彼の目的は、日本独自の観音霊験譚を集積することにあった。

書承の方面から見ると、蓮体が『観音冥応集』の前提とした典籍は「観自在観音菩薩本説ノ事附タリ援引書目」（巻一・一）に詳しい。ここには観音の功徳や利益について記す典籍の名が列挙されており、百部近くの経典・儀軌類や、中国撰述の各種の「高僧伝」および『法苑珠林』『観音応験記』（佚書）など二十部が掲げられている。蓮体は、これらの書物を挙げることで観音の功徳が古今東西で説かれてきたことを証明しながらも、基本的にそれらの引用はしないという姿勢を示した上で、次いで『類聚国史』『日本霊異記』『元亨釈書』をはじめとする日本撰述の「援引書目」三十三部を示す。「三十三部」は観音の「三十三身」に因んだもので、実際には蓮体が挙げる「援引書目」以外にも、『袖中抄』『本朝神社考』『大和名所記』などの古代中世から近世にわたる多くの文献が、『観音冥応集』の取材源になった作品として確認される。[2]

一方で、『観音冥応集』の典拠には、地方の寺院縁起も多く含まれている。それらの中には、文献から引用されたものだけではなく、蓮体自身が当地で直接見聞し、取り入れたものも存在する。また、『観音冥応集』には、蓮体が同時代に見聞した事件の記事が随所に載せられており、中には、「予宝永二年四月十九日故ニ陟テ巡礼シ、縁起ヲ披見シ、寺僧ノ説ヲ聞リ。」（巻五本・二一）、「予宝永二年、三月廿一日、故ニ詣シテ観音ヲ拝シ、浦辺ヲ遊覧シテ、感歎シキ。」（巻五下・三八）のように、『観音冥応集』自序執筆の宝永元年（一

七〇四）から、刊行された宝永三年（一七〇六）の間に取り入れられた最新の情報もある。『観音冥応集』に見えるこれらの記事は、地方寺院史あるいは民俗学の分野においても貴重な資料となる可能性を有している。

本稿で取り上げる備中・日差山宝泉寺縁起は、『観音冥応集』の巻四・十八として収載されたものであり、蓮体が実際に赴いた先で収集した地方縁起の一つである。本稿では、まず蓮体がこの縁起に接することになった背景を明らかにした上で、蓮体が備中でおこなった書写・執筆活動の一端を明らかにする。さらに、『宝泉寺縁起』をめぐって縁起が再生産されてゆく様相と、その過程について考察したい。

一、蓮体と備中

『観音冥応集』の編者である蓮体は、寛文三年（一六六三）、河内国清水村（現大阪府河内長野市清水）に生まれ、十二歳の時に覚彦浄厳（一六三九～一七〇二）のもとで出家し、初め本浄妙厳と名乗った。浄厳と蓮体は血縁上でも叔父と甥の関係にあたる。蓮体は浄厳が亡くなるまで三十年間近く仕え、後に『浄厳和尚行状記』を著している。[3]

浄厳は、新安祥寺流の祖として知られる人物で、江戸に赴いて五代将軍徳川綱吉や柳沢吉保らの篤い帰依をうけ、湯島に幕府の祈願所となる霊雲寺（現東京都文京区）を建立した。その一方で、浄厳は各地へも赴き、盛んに教化活動をおこなった。蓮体もまた、教化や付法のために地方へ赴いている。その際に見聞した説話や縁起、あるいは巷間の噂は、後年、『観音冥応集』に収載されることになった。

本稿で考察の対象とする「宝泉寺縁起」は、そのような縁起の一つであり、備前および備中がその舞台となっている。蓮体と当地の関係を明らかにしていく上で、まずは『観音冥応集』と、同じく蓮体が地蔵の霊験譚について収載した説話集『続礦石集』[4]の中から、備前あるいは備中に関連する記事を以下に用例として掲げる。なお、文中の地名の語句には傍線を付した。

(1)『観音冥応集』巻三・六「小女普門品ヲ誦シテ大蛇ノ難ヲ遁ルヽ事」

○又備前ノ国山中ニ、八月十七日、祭礼ノ処アリ。…（僧の諫めを聞かず毒茸を食した者たちが亡くなる）…是モ近キ事ナレバ、備前ノ人ノ物語ヲ聞リ。

(2)『観音冥応集』巻四・十二「猫神ノ妖怪。並ニ夜干ノ事」

貞享年中ニ、備前岡山ノ家中ニ、猫神トテ小キ社アリ。

(3)『観音冥応集』巻五・二十七「伽藍ヲ穢ス罰並ニ霊仏ノ不思議ノ事」

又備前国岡山平医山円覚寺薬師院ノ本尊、薬師如来ノ銅像ハ、古老相伝テ曰ク、中天竺迦毘羅衛国浄飯大王ノ御作ニテ、釈迦如来ノ開眼供養ジ玉フ尊像ナリト。…（不

浄の僧が亡くなる）…是ハ近キ事ニテ、予彼寺ニ往テ、面会ニ聞ル事ナリ。

(4)『観音冥応集』巻六・七「野狐ニ誑カサレテ、死スベキヲ、観音ノ助玉フ事」

昔人王五十九代、宇多天皇駅宇寛平年中ニ、備中ノ国ニ賀陽良藤ト云者アリ。…〈釈書ノ三十〉

(5)『続礦石集』巻一上本・「三ニハ弘法大師御利生並ニ光明真言功能ノ事」

○又元禄八年ノ秋備前ノ岡山ニ赴キ、同九年ノ春住心品疏ヲ講ジ結縁灌頂ヲ行ズ。…備中賀陽郡ニ仲田氏ノ信士アリ。…

(6)『続礦石集』巻一上本・「九ニハ誹謗正法ノ人現報並ニ冥府ヲ見テ甦ル人ノ事」

○又備前ニ一僧アリ。毎日談義スルニ他宗ヲ誹謗スルコト傍若無人ナリ。…

(7)『続礦石集』巻一上本・「十ニハ光明真言加持土沙ノ利益ノ事」

元禄中ニ備後ノ国田嶋ニ奥ノ坊ト云真言寺アリ尾道西国寺ノ子院ナリ。住持本寂ハ予ガ旧友ナリ。…○又備前麹屋アリ。麹ヲ造ルニハ油虫多ク生ジテ、花ヲ食フニ依テ損ズルコト多シ。…○又岡山ノ河口ニ新田数百町アリ。…

右に掲げた用例のうち、用例(4)は、末尾に「釈書ノ三十」（点線部）と明記されているように、『元亨釈書』巻三十からの引用である。それ以外は、用例(1)波線部に「是モ近キ事ナレバ、備前ノ人ノ物語ヲ聞リ」とあるように、蓮体の時代に近いか、あるいは同時代の話であり、しかも蓮体が直接聞いた話が多い。用例(3)は、「平医山円覚寺薬師院」（現在の岡山市磨屋町）の縁起と寺での事件に取材したものであるが、ここでも「是ハ近キ事ニテ、予彼寺ニ往テ、面会ニ聞ル事ナリ」（波線部）とあり、当代性が示されると同時に、蓮体が直接現地に赴いた際の見聞であることが示されている。

用例(5)の引用文には、「元禄八年ノ秋備前ノ岡山ニ赴キ、同九年ノ春住心品疏ヲ講ジ結縁灌頂ヲ行ズ」とあり、蓮体が講義や伝法灌頂を授けるために彼の地に赴いていたことが知られる。こうした機会に、蓮体は当地における様々な話題や寺院の縁起などに接していたと考えられよう。

二、蓮体の普賢院時代

次に、備中における蓮体の拠点について考えていく。蓮体は、故郷の清水村に玉井山地蔵寺を再興し、後に晩年の拠点とするまでに、幾つかの寺の住持を経験している。そのことについて、後年地蔵寺の住持となった照遍が著した「蓮体和尚行状記」[3]には、次のように記されている。

①号二六隠乞士一由来者。和尚徳行抜群ノ故ニ。讃州ノ大守龍雲院殿源英大居士。深ク帰依シ給ひ。常ニ供養不

レ浅となり。和尚書写の聖教の紙は皆尽く源英大居士の寄附する所なり。如レ是帰依し給ふ故に。於二彼国一令三和尚為二龍燈院。世尊院両寺住持一。和尚其後移二住備中国宮内普賢院一。復移二住摂州東成郡今里村妙法寺一。此地近二大阪市城一不レ閑静一故。移二住河州高安郡教興寺一。後復任二浄厳和尚遺命一移二住河南鬼住村延命寺一。終復隠二遁当寺一。故に自号二六隠乞士一也

右の文には、蓮体が名乗った「六隠乞士」という号の由来が示されている。それによれば、蓮体は、讃州高松初代藩主松平頼重（龍雲院、一六二二～一六九五）の帰依を受けたことから、讃岐国の龍燈院・世尊院両寺の住持を務め、その後、備中国宮内普賢院に移った。また、摂津国の妙法寺、河内国の教興寺、さらに浄厳の没後には、浄厳が建立した延命寺の住持を継いでいる。以上の六か寺の住持を務めたことにより、蓮体は「六隠乞士」と号したことが知られる。

ここで注目したいのは、その六か寺のうちの「備中国宮内普賢院」である。同じく「蓮体和尚行状記」から、蓮体三十五歳（元禄十年）の記事を引用する。

②和尚三十五歳〈元禄十年〉於二播磨密厳院一講二二教論一。三十一席にして満ぜり。さて講演中に授二菩薩戒一。受者五十七人あり。皆是護持禁戒法器にして。非レ如二今時結縁受戒人一也。又修二行伝法灌頂一。受者二人。又修二行受明灌頂一。受者二十人。又修二行結縁灌頂一。受者一万千五百余人。又授二臨終大事一。受者百八十余人。又授二光明真言及血脈一。受者一千余人。又授二一日一夜斎戒一。受者八百余人。四月上旬の頃密厳院の講釈も満じぬれば。此より往二備中宮内普賢院一安居。為二僧徒一講二普門品及び秘蔵宝鑰一。又授二菩薩戒一受者百八人。又授二安流印可一受者二十五人。又授二光明真言及血脈一受者一千二百八十余人。安居竟て七月十九日発二備中一帰二河南一。

元禄十年（一六九七）、蓮体は播磨の密厳院で『弁顕密二教論』の講釈や、結縁灌頂、受明灌頂（数百年間途絶えていたところを浄厳が復活させたもの）、伝法灌頂等をおこなった。四月上旬の頃になって密厳院の講釈も満了し、次に蓮体は備中宮内普賢院に行き安居した。そこでも僧徒のために『法華経』普門品および『秘蔵宝鑰』を講じ、菩薩戒や安祥寺流の印可等を授けている。安居の後、七月十九日に備中を発し、河南に帰っている。蓮体は、この頃からすでに、備中に拠点を有していたことが知られる。

また、蓮体は、享保四年（一七一九）五十七歳の時にも、普賢院を訪れている。

③五十七歳〈享保四年〉…三月十二日詣二仏生山一到二長尾神正院一宿。十三日詣二東林山一宿。十四日帰二高松一。十九日剃髪者三人　同廿四日赴二備前岡山一宿二播磨屋一。廿八日入二上道郡国富村勝髪山法輪寺一掛レ錫自二四月一日一至二十八日一講二地蔵本願経一十八座。廿一日行二受明灌頂一

〈胎蔵〉受者十一人。廿二日より至廿八日行結縁灌頂。
入壇者一万四千五百九十五人。廿九日授臨終大事受者
二百余人　五月朔日剃髪者四人。二日赴宮内普賢院三
四両日講地蔵本願経。五六両日講神文いろは略釈了
帰岡山　八日朝天纜を解て赴高島松林寺宿。九日牛
窓雨に到る。十日到二谷。十一日著浪華。十二日到
堺。十三日帰山安居。

右に掲げた記事は、「蓮体和尚行状記」に見える、享保四年三月から五月までの蓮体の活動記録である。この記事によれば、まず四国を廻った後、備前に赴き、五月二日から備中の宮内普賢院で講釈をおこない、また岡山に戻っている。八日に児島湾の高島松林寺に行き、九日に牛窓、十日に須磨一ノ谷、十一日に浪華へ着き、十二日に堺へ到り、ようやく十三日に帰山している。蓮体は正徳五年（一七一五）に既に地蔵寺の住持となっていたが、それ以降も各地に赴いていたことが知られる。

また、次に資料として掲げるのは、讃岐国分寺所蔵の「蓮体書翰」である。(8)

前略　去年は貴邦大旱寺院方迄御難儀の至に奉察候上方同様に御座候、当年も何共難心得年にて御座候間諸事覚悟用心可被成候、旧冬は長崎延命寺より請侍に使僧上り申候、是は内々為一見下向仕度存候得共老衰の上殊に貴邦淡州備前等十七八ヶ所の請を肯諾候故遠境の長崎へ下向とは難申候、追付け冥途より使来り可申候間其の節は賽の河原の子供の方へいろ〳〵の菓子土産共持参仕り地蔵経の講義可仕と存候、既に高祖御入定の年先師掩化の齢に到り候ては頼みなき事のみに候、…恐惶謹言

正月二十四　　本浄

国分寺様

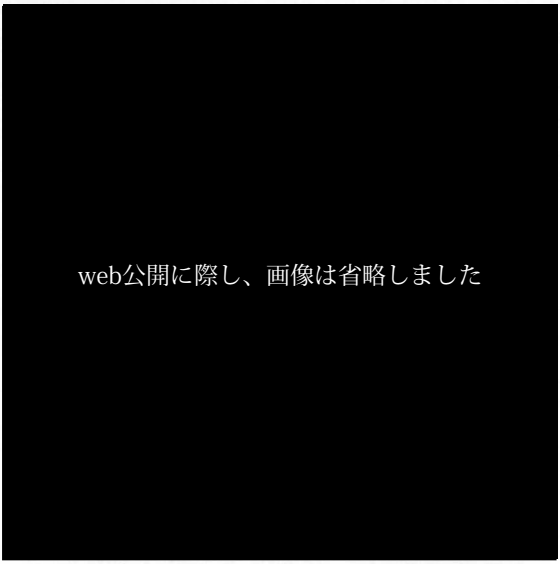
長崎の延命寺から、蓮体を講義に招聘する依頼が寄せられたが、傍線部には「讃岐や淡州、備前等、十七八ヶ所もの招きを請けてしまっている」ので、長崎への下向は難しいと述べられている。なお、この書翰において、蓮体は「高祖御入定の年、先師掩化の齢」に到ったと述べている。高祖弘法大師空海の入定は六十二歳、「先師」すなわち浄厳の入寂は六十四歳にあたる。蓮体が浄厳の没年齢と同じ六十四歳になったのは、享保十一年（一七二六）の年である。また、この年の八月に蓮体はその生涯を閉じている。したがって、先に引用した書状は、享保十一年に書かれたものである可能性が高い。蓮体は、最晩年にいたるまで、講釈等の活動のため、各地に足を運んでいたことが知られるのである。

さて、蓮体が住持となった備中宮内普賢院は、かつて吉備津神社の社僧であった。現在も残る「宮内」という地名は、吉備津神社との関係によるものである。当時は周辺の寺院に対しても影響力を有する寺院であった。この普賢院の本堂には蓮体の位牌が祀られており、かつて蓮体が住持を務めてい

た跡が残る。

さらに、蓮体の活動跡は、周辺の寺院にも残されている。その例として挙げられるのが、地蔵院蓮福寺に所蔵されている『八幡山蓮福寺縁起』である。

次に掲げる写真は、その蓮体自筆による縁起の奥書部分である。



【資料1】地蔵院蓮福寺蔵『八幡山蓮福寺縁起』末尾・奥書部分（蓮体自筆）

【写真】『八幡山蓮福寺縁起』末尾・奥書部分

【翻刻】

地蔵院蓮福寺は、現在の岡山市高松原古材に所在する真言宗寺院である。本尊は地蔵菩薩像で、興教大師覚鑁作と伝えられる。正徳五年（一七一五）、蓮体はこの地蔵菩薩像の来由を聞く機会を得て、新たに縁起を作成した。

蓮体が『八幡山蓮福寺縁起』を執筆した正徳五年は、彼が地蔵寺に入った年次に当たる。自坊の本尊でもある地蔵菩薩やその霊験に対して以前から関心の深かった蓮体は、右に示した引用部分に続けて、地蔵関係の経典類と自らの著作である『礦石集』などを列挙している。地蔵院には、この蓮体作の縁起以前に作られた縁起類も所蔵されており、蓮体は実際にそれらの古い縁起を参照しつつ執筆したと考えられる。

では、蓮体と宝泉寺との関わりはいかがであろうか。以下

に掲げるのは、宝泉寺に所蔵される伝法灌頂の印信である。

【資料2】宝泉寺蔵「伝法灌頂／正徳元年十月二十七日奉受之宥泉」（蓮体自筆）

【写真】蓮体・宥泉伝法灌頂資料

【翻刻】

この印信資料からは、正徳元年（一七一一）、宝泉寺の住持であった宥泉に、蓮体が安祥寺流の伝法灌頂を授けたことが知られる。伝法灌頂自体は『観音冥応集』の刊行よりも後のことであるが、蓮体と宥泉の間にはこれ以前より交流があったとみてよいであろう。宝泉寺には歴代住持を記した位牌が所蔵されているが、宥泉はその中に正徳六年（一七一六）正月十一日没と見え、宝泉寺の中興とされている人物である。先代の住持隆遍が延宝二年（一六七四）没であることから、蓮体に『宝泉寺縁起』をもたらしたのは、宥泉であった可能性が高い。

以上のように、蓮体は普賢院の住持を務め、また周辺の寺院にもその執筆活動の跡を残している。蓮体が『観音冥応集』に宝泉寺の縁起を摂取した状況もうかがえよう。

三、『観音冥応集』所収の「宝泉寺縁起」

現在の宝泉寺は、岡山県倉敷市矢部（備中国都宇郡矢部村）に所在する高野山真言宗の寺である。備中霊場の第二十九番にあたり、聖観世音菩薩（正観音）を本尊とする。

次に掲げるのは、『観音冥応集』巻四・十八「備中宝泉寺ノ観音ノ縁起、並ニ報恩大師ノ事」である。便宜上、内容をA〜Eの五つに分けた。各部の題は私に施したものである。

Ⓐ 報恩大師の開基

備中国都宇郡矢部村日差山宝泉寺ハ孝謙天皇ノ御宇ニ報恩大師ノ開基ナリ。

Ⓑ 報恩大師伝

釈書ニハ報恩ノ伝アリトイヘドモ、生国俗姓ヲ記サズ。今其ノ生国ヲ尋ヌルニ、備前国津高郡駅郷波河村ノ農夫ノ子ナリ。曽テ母夢ラク、大海ノ中ニ孤絶ノ高山アリ。峯ニ一片ノ紫雲アリ。雲ノ上ニ沙門アッテ、蓮花ニ坐シテ告テ曰ク、我ハ是観音ナリ。生ヲ汝ガ胎内ニ託シテ、衆生ヲ済度セント思フト、母夢覚テ不思議ノ思ヲ作トイヘドモ、敢テ人ニ語ラズ。懐妊ノ日ヨリ、種々ノ瑞相アッテ、異香室ニ満チ、紫雲軒ニ垂レテ、夜ノ夢但シ妙事ノミヲ見ル。月満テ産生ノ時ニ、天蓋空ニ現ジテ、大地頻ニ震フ。童子誕生ノ後、口ニハ常ニ観音ノ呪ヲ念誦シ、身ニハ必ズ形像ヲ常持ス。時々ニ頭光ヲ顕シ、或ハ空中ニ挙ル。深ク在家ヲ厭ヒ、早ク出家シテ吉野山ニ入リ、常ニ大悲心陀羅尼ヲ持誦シ修験ヲ得玉ヘリ。時ニ孝謙天皇瘧病ヲ煩ヒ玉フ。時ニ勅ヲ奉テ加持スルニ、御悩乍ニ平愈シ玉ヘバ、叡感ノ余リニ名ヲ報恩大師ト賜フ。

Ⓒ 日差山と心浄大師（智久）への付属

後ニ備中日差山ニ於テ一寺ヲ建立シテ、弟子智久ニ付嘱シ玉フ。智久法師ハ恩公備中ノ津坂ニ往玉フ時ニ駅子ガ家ニ十二三可ノ童子アリ。頭光ヲ放テ恩公ヲ照ス。恩公怪シク思ヒ、家主ニ問フ。是ハ汝ガ子カ。駅子ガ曰ク爾ナリ。恩公ノ曰ク、是凡児ニアラズ。我ニ与ヘハ日差山ニ一寺ヲ建テ付嘱スベシト。依テ出家セシメテ譲リ玉フナリ。時ニ桓武帝目ヲ患ヒ玉ヒテ、天下ニ詔シテ有験ノ高僧ヲ召玉フニ、備中ノ国司智久法師ヲ奏ス。即チ勅ニ随テ禁中ニ参内スルニ、種々ノ奇瑞アリ。上皇近ク召シ玉ヘバ、御眼即チ明ニナリヌ。帝大ニ悦テ、汝ハ何人ノ子ゾト尋ネ玉フ。智久備中ノ駅子、駅護子トカ答ス。帝聞シメシテ心正直清浄ナリトテ、心浄大師ト呼玉フ。後ニ日差山ニ於テ掩化ナリ。今ノ乙大師ノ廟是ナリ。

Ⓓ その他の報恩大師開基寺

恩公曽テ備前ノ児嶋ノ藤戸、並ニ瑜伽山ニ寺ヲ建テ、暫ク住シ、次ニ大和国高市郡矢田郷ニ一寺ヲ営ンテ児嶋寺ト号ス。備前ノ児嶋ヨリ移リ玉フガ故ナリ。即チ今ノ壺坂寺是ナリ。此寺ハ一百余人ノ門徒ノ中ニ、延鎮法師ニ附嘱シ玉フ。或説ニハ延鎮、報恩ハ同人トモイヘリ。然レトモ釈書ニ二人ノ伝ヲ出ハ、別人ナルコト明ナリ。恩公ハ延暦十四年六月二十八日ニ、児嶋寺ニテ遷化ナリ。

Ⓔ 近世における宝泉寺観音像の流転

日差山ノ観音ハ、清水寺ノ観音ト同木ニテ作チ玉フト云。

昔シ本堂炎上ノ時モ、本尊ハ焼玉ハズ、南ノ山ニ飛去リ玉フ。上代ハ寺院十二坊アリ。今ハ一寺ナリ。寛永十三年ニ、悪人アツテ尊像ヲ河ニ流スニ、光リヲ放チ、備前ニ流著玉フニ依テ、流観音ト号シ奉ル。同ク十四年ニ是ノ尊像ハ、日差山ノ像ナリト告ル者アリテ、二月十七日ニ昔ノ山ニ送リケレバ、松平少将光政公、小堂ヲ建立シ玉ヒテ六月十八日ニ安像慶讃セリ。尊像二尺五寸、脇士ハ不動毘沙門ナリ。爾後備前ニ敗儒流布シテ、酷タ仏法ヲ排スル故ニ、尊像ヲモ櫃ニ納メ蔵シテ知ル人ナシ。延宝六年、十月晦日、重テ矢部村宝泉寺ニ帰入リ玉ヘリ。委細ハ旧記ニアリ。今ハ要ヲ取テ記スルモノナリ。

冒頭で示されているように、宝泉寺の開基は、奈良時代の高僧として知られる報恩大師と伝えられている。右の引用Cによれば、天平勝宝元年（七四九）、孝謙天皇の勅命によって報恩大師は備中の日差山に一宇を建立し、その後、駅子の家で見出した智久を弟子として寺を付属したという。この智久法師は桓武天皇の眼病を治癒したことから「心浄大師」という大師号を賜ったとされており、開基の報恩大師に対して第二世という立場から「乙大師」とも呼ばれている。現在、日差山の山頂には報恩大師と心浄大師の碑が歴代の住職の墓石とともに並んで建てられている。この日差山は、羽柴秀吉による備中高松城攻めの際、毛利方の小早川隆景の陣所となったことでもよく知られている地であるが、宝泉寺はその時の戦乱の影響を蒙り、荒廃してしまうことになる。さらに、慶長年間（一五九六～一六一五）には火災によって本堂が焼失する事態が起こった。また、日蓮宗への改宗を迫られた際に、それを拒んで宝泉寺の各坊はそれぞれ山から降りることになった。日差山上にあった十二坊のうち、満願坊（院）と称した坊が現在の宝泉寺の前身である。

ところで、蓮体が宝泉寺で目にした縁起の内容は、どのようなものだったのだろうか。残念なことに、宝泉寺に伝わっていた原本は、昭和二十二年（一九四七）に起こった火災により烏有に帰してしまった。そこで、昭和三十二年（一九五七）、当時の住職によって書写されたのが、現在宝泉寺で所蔵されている『備中日差山宝泉寺縁起』である。この写本の奥書には当時の書写事情が記されている。それによれば、昭和十三年（一九三八）に宝泉寺において書写されていた吉田謙三氏蔵本を底本とし、友野家所蔵「日差山縁起」の写本を参考にして、新たに縁起を作成した、ということである。以上の書写過程を図にすると次のようになる。

宝泉寺蔵本Ⅰ →（昭和22年焼失）
吉田謙三氏蔵本 →（昭和13年5月、宝泉寺において書写）
宝泉寺蔵本Ⅱ →（昭和32年書写）
友野家蔵 日差山縁起（参照）

近年の書写ではあるものの、この縁起によって、蓮体が『観音冥応集』を執筆した時にどのようなものを参照にしたのかを知ることができる。

先に掲げた『観音冥応集』巻四・十八は、宝泉寺所蔵の縁起を典拠としたものであるが、縁起をそのまま転用したわけではなく、文脈に沿いつつも独自に補った部分が見受けられる。例えば、Bの冒頭部分における「釈書ニハ報恩ノ伝アリトイヘドモ、生国俗姓ヲ記サズ」という記述は、『観音冥応集』が頻繁に参考にした『元亨釈書』をもとに蓮体が独自に注釈を施している部分である。

縁起と『観音冥応集』を比較すると、多少の異同はあるものの、前半のBやCはほぼ縁起に忠実に引用がおこなわれている。しかし、後半は、追加あるいは省略が多くなることが看取される。例えばDでは、先に指摘したような注釈的文言が追加されている。「児島寺」に対して「即チ今ノ壺坂寺是ナリ」とする記述がそれにあたり、さらにBの冒頭と同様に『元亨釈書』に基づいた注釈も施されている。一方、Eの近世において本尊が受けた苦難の経緯については、縁起の内容を簡略化する形で記述されている。比較のため、次に縁起の一部を掲げる。

web公開に際し、翻刻は省略しました

右は、先に掲げた『観音冥応集』の構成の中でEに当たる部分の典拠となった箇所である。「聞書云」として始まる近世の記録部分は、縁起原本では二字下げかつ小字で記されており、それ以前とは区別されている。ここでは中略しているが、省略部分では、本尊の観音像が他宗の者によって河に遺棄されたり破壊されたりと苦難の流転を経たことについて詳細が語られている。一方、『観音冥応集』では、観音を迫害した者や観音を救った地元の有志の名前はいずれも省略され、概略を簡潔にまとめた文章になっている。縁起末尾の点線部分は『観音冥応集』に引用されている部分であるが、両者を比較することにより、『観音冥応集』末尾の「委細ハ旧記ニアリ」という部分は縁起そのものにあり、「今ハ要ヲ取テ記スルモノナリ」という部分は蓮体自身が追加した文であったと区別できる。

縁起が引用する「聞書」以下は、延宝六年（一六七八）に観音が矢部村の宝泉寺へ帰寺するまでを語り、「戸川縫殿助御内　施主　市川利右衛門利吉」という名を記している。この「戸川縫殿助」とは、備中国庭瀬藩の第四代藩主である戸川安風（一六七一～一六七九）を指していると考えられる。安

風は父の死去に伴い、延宝三年（一六七五）に家督を継ぐも、延宝七年（一六七九）にわずか九歳で亡くなった。文中に延宝六年の年次が見えることから、この部分の成立時期は特定できよう。

近世の記録部分が縁起に付加されて作られたのは、まさに蓮体が生きた時代であり、蓮体はその新しい資料を『観音冥応集』に取り入れたのである。

四、縁起の再生産

前節までは蓮体『観音冥応集』が引用した「宝泉寺縁起」を見てきたが、さらに遡源を試みて、『宝泉寺縁起』そのものがいかなる典拠によるものであったのか指摘したい。ここで注目されるのが、報恩大師開基備前四十八ヶ寺[7]の本山として知られる金山寺（現在の岡山県岡山市）に伝わる縁起との影響関係である。実は、『備前国金山観音縁起』の前半部分は、『宝泉寺縁起』の本文とほぼ一致するのである。

以下にａ『宝泉寺縁起』（『備中日差山宝泉寺縁起』）とｂ『金山寺縁起』（『備前国金山観音寺縁起』）を並べて掲げる。[8]

web公開に際し、
翻刻は
省略しました

右に掲げたａ・ｂを比較してみると、この縁起冒頭部分では、両寺とも、孝謙天皇の御宇である天平勝宝元年に報恩大師が勅命を蒙って建立されたものであると述べられている。引用の冒頭と末尾にある寺の名前を除けば、両者はほぼ同文であることがわかる。ただし、本尊を大師が自ら作ったとする点は共通しているが、観音の種類については、ａは「正観音」、ｂは「千手観音」と異なっている。次に挙げる用例でも、両者の縁起がほぼ同文で、本尊のみに異同があることを確認することができる。

[redacted]
web公開に際し、
翻刻は省略しました

しかしながら、先の引用①における両者の決定的な相違は、「同木異体」（同じ木から複数の像が造られていること）をめぐる記述にある。すなわち、b『金山寺縁起』が清水寺観音と同木異体であるとするところを、a『宝泉寺縁起』は清水寺観音だけでなく、さらに金山寺の観音とも同木異体とするのである。この同木異体に関しては、他にも次のように記されている。

[redacted]

清水寺の創建には、報恩大師の弟子である延鎮が関わったとされる。引用③においても、金山寺が清水寺との関係を主張するのに加えて、宝泉寺はそこに金山寺との関係を取り込み、三者の「同木異体」を主張している。このことから、明らかに『宝泉寺縁起』は『金山寺縁起』を参照して作られたと考えられる。

『宝泉寺縁起』が『金山寺縁起』を参照したということは、すなわち『金山寺縁起』の方が成立が先であったということになる。ところが、そのように単純に捉えきれない関係が両者には存在するのである。

金山寺の堂内には、現在、報恩大師と心浄大師の像が安置されているが、『金山寺縁起』の冒頭は、報恩大師の伝記を述べ、日差山上に一寺が建立されたことを語り、その寺が心浄大師に譲られたとする。その記述の内容は、『宝泉寺縁起』とほとんど変わらない。

しかし、報恩大師が寺を建立したのは、『金山寺縁起』でも「其後大師登二備中州日差山一、建二立一寺一、付二属弟子一」とあるように、あくまでも備中の日差山であり、金山寺との直接的な関係が述べられていない点には留意すべきであろう。『宝泉寺縁起』と一致する日差山や心浄大師についての記述と、以降の『金山寺縁起』独自の記述とは結びついてこないのである。以上の点から見れば、『金山寺縁起』も元来は日差山に伝わる縁起を取り入れて作られたものであったと考えられるのではないだろうか。ここには、寺の縁起が再利用・再生産されていく様相を見ることができよう。

おわりに

宝泉寺には、本尊ご開帳の際に読み上げられた、天保九年（一八三八）写の略縁起が所蔵されている。

[redacted]
web公開に際し、翻刻は省略しました

承応二年（一六五三）の「当国撫川戸川公」は、備中国庭瀬藩第二代藩主戸川正安（一六〇六～一六六九）に比定される。また、注目すべきは波線部で、「感応冥応集」なる書名が見える。これは恐らく『観音冥応集』の誤りと考えられる。

『観音冥応集』巻四・十八「備中宝泉寺ノ観音ノ縁起、並ニ報恩大師ノ事」の次に載せられる、巻四・十九「友野氏観音御利生ノ事」は、『宝泉寺縁起』の後日譚ともいうべき説話である。備中国都宇郡山手村の何某という「士（サフラヒ）」が、禁中の御用の勤めを済ませて帰郷する際、「十二三可（バカリ）ナル小僧」と同道することになる。この小僧が歩く速さは尋常ではなく、「士」は小僧の腰に取り付けた手巾に取り付かせてもらう。その速さは、辰の刻に都を出立して申の刻に到着するほどであった。備中の矢部村にたどり着いた小僧は、「士」に向かい、次のように述べる。

[redacted]

この「系図ノ巻物」「一巻ノ書」ならびに「小僧」の正体については、巻四・十九の末尾に次のようにある。

[redacted]

すなわち、「小僧」は日差山の観音であり、「一巻ノ書」は観音の縁起だったというのである。この宝泉寺観音と「友」になったことを姓の由来とする「友野氏」については、『宝泉寺縁起』の近世記録部分に、その名が見られる。

[redacted]

寛永十三年（一六三六）、宝泉寺の観音像は川から海に流されるという災難に遭う。その時、観音像の帰還のために尽力した者の筆頭に「山手村友野某」の名が挙げられている。現在も友野家は宝泉寺の檀家としてその絆を保たれている。

『観音冥応集』巻四・十九末尾によれば、当時の友野氏の名は広く知れ渡っていたようであるが、蓮体本人も現地において友野氏の人々と実際に接する機会をもった可能性もあろう。

蓮体は、備中における宝泉寺の縁起と、その檀家の友野氏の縁起を『観音冥応集』所収説話の一つとした。やがて時は流れ、宝泉寺の略縁起に見えるように、今度は『観音冥応集』が縁起に取り込まれるようになったのであった。そこからも、縁起が相互に影響し合い、また繰り返し生み出されていく仕組みが明らかに浮かび上がってくるのである。

web公開に際し、
翻刻は
省略しました

注

（1）『宝永版本 観音冥応集 本文と説話目録』（神戸説話研究会編、和泉書院、二〇〇六年）。

（2）注（1）巻末の中原香苗・山崎淳「解説」参照。

（3）蓮体の事跡については、上田進城「蓮体和尚」（『密宗学報』一四五、一九二五年）、『河内長野市史』第二巻・本文編・近世（河内長野市史編修委員会、一九九八年）、『平成18年度資料館秋季特別展　元禄の高僧　浄厳と蓮体―河内から江戸へ』（河内長野市郷土資料館、二〇〇六年）等参照。

（4）大阪女子大学附属図書館所蔵和漢書［184／R］にて確認した。

（5）照遍「蓮体和尚行状記」（上田覚城編『照遍和尚全集』第六輯、照遍和尚全集刊行会、一九三二年）。

（6）上田進城「蓮体和尚」（『密宗学報』一四五、一九二五年）。

（7）下出積與「報恩大師伝説考」（下出積與編『日本史における民衆と宗教』山川出版社、一九七六年）、『平成14年度特別展　備前四十八ヶ寺―近世備前の霊場と報恩大師信仰―』（岡山県立博物館、二〇〇二年）等参照。

（8）『金山観音寺縁起』の引用は、藤井駿・水野恭一郎共編『岡山縣古文書』第二輯所収「浦上則宗袖判備前国金山観音寺縁起写」［金山寺文書］（思文閣出版、一九五五年）による。なお、『金山観音寺縁起』については、次に掲げる藤井駿「備前国金山寺文書（重要文化財）について」（『吉備地方史の研究』法蔵館、一九七一年。初出は『吉備の文化財』5号、一九七〇年三月）参照。

・この縁起はその奥書に治承四年（一一八〇）とあるが、袖に室町時代の中頃、備前国の守護代であった村上則宗の花押があり、室町時代の製作と推定される。

・「備前国四拾八ヶ寺領并分国中大社領目録」（文禄四年）などを見ると、宇喜多時代の金山寺は、宇喜多氏の分国である備前・美作および備中の東部における、寺社の総管者的地位に立って

いたもののようである。報恩大師の創立にかかると伝える備前国の四十八か寺や備前国の一宮吉備津宮・備中国の一宮吉備津宮などの旧記が金山寺に現存するを見れば、当時この地方の宗教界における金山寺の勢力が察せられる。

【参考】蓮体年譜（備中との関わりを中心に）

年次	西暦	齢	事柄
寛文三年	一六六三	1	誕生。
延宝二年	一六七四	12	出家。
元禄四年	一六九一	29	地蔵寺を再建しはじめる。
元禄六年	一六九三	31	一月、『礦石集』刊行。
元禄八年	一六九五	33	秋、備前岡山に赴く（続礦石集一上本）。
元禄九年	一六九六	34	春、住心品疏を講じ、結縁潅頂を行ず（続礦石集一上本）。
元禄十年	一六九七	35	四～七月、備中宮内普賢院に安居。十月、教興寺を付される。
元禄十五年	一七〇二	40	十二月、『浄厳大和尚行状記』撰述。
元禄十六年	一七〇三	41	一月、延命寺住持となる。
宝永三年	一七〇六	44	十一月、『観音冥応集』刊行（刊記・自序は宝永元年）。
正徳元年	一七一一	49	十月二十七日、宝泉寺住持の宥泉に付法。
正徳五年	一七一五	53	地蔵寺に退隠。五月二十四日、『八幡山蓮福寺縁起』（備中・地蔵院蓮福寺）。
享保四年	一七一九	57	三～五月、讃岐・備前・備中で布教活動。五月二～六日、備中・宮内普賢院で「地蔵本願経」「神文いろは略釈」の講義。八月、蓮体没。
享保十一年	一七二六	没後	二月、『続礦石集』刊行。
享保十二年	一七二七	64	

【付記】

末筆ながら、貴重な縁起や聖教類の閲覧と撮影のご許可をいただき、数々のご高配を賜りました日差山寶泉寺ご住職藤井秀範氏、地蔵院蓮福寺ご住職西原浄雲氏、まだご教示いただきました普賢院ご住職真西橿範氏に深謝申し上げます。

なお、本稿は、平成十八年度仏教文学会例会（於大阪府立大学）における口頭発表の一部に基づくものである。

また、本研究は、財団法人福武学術文化振興財団平成十七年度歴史学地理学助成による成果の一部でもある。

（なかがわ・まゆみ　日本学術振興会特別研究員）